

コンロ使用時のヒヤリ事例



鍋を火にかけたまま外出。途中で思い出し慌てて帰ったが鍋が真っ黒になった。

揚げ物をしていて突然の来客に対応して火を消し忘れ、鍋の油に火がついた。

- コンロ使用中は絶対にその場を離れないようにしましょう。離れる場合は火を消しましょう。
- コンロの周りに燃えやすい物を置かないようにしましょう。
- 換気扇やコンロ周りの壁、魚干リル等は定期的に掃除しましょう。

コンロ使用時の注意事項

コンロを原因とした火災は減少傾向にありますが、建物火災の原因としては依然として多くなっています。総務省消防庁が発表している建物出火原因別をみると「コンロ」、「たばこ」、「電子機器」の順番になっています。コンロが原因の火災を防ぐために、次の事項に注意しましょう。

コンロ火災に注意!

幼年消防クラブ
ぼくたち わたしたちは 火あそびはしません

6月中旬に上島町内の各保育所において、令和3年度幼年消防クラブ結団式が行われました。

園児たちは、火災の恐ろしさや避難時の心がけについて学び、消防車や救急艇の見学を行いました。最後に記念撮影を行い、園児たちは誓いの言葉を大きな声で約束しました。これから1年間、火災予防について学び、防火パレードなどの啓発活動にも取り組みます。



生名地区 幼年消防クラブ



岩城地区 幼年消防クラブ



弓削地区 幼年消防クラブ



魚島地区 幼年消防クラブ

令和3年6月出動件数

地区	弓削	生名	岩城	魚島	その他	合計	R3累計
火災	0	0	0	0	0	0	1
救急	20	2	6	2	0	30	201

(令和3年6月30日現在)

上島町消防署 ☎77-4118



カンキツ類の日焼け果対策

地球温暖化が叫ばれて久しく、最近の気象変動は、その影響が出始めているのではないかと考えさせられます。特に台風の大規模化や集中豪雨(ゲリラ豪雨)は、人命に関わる被害につながり、毎年のように発生しています。また、夏の気温は、酷暑と表現されるように厳しい暑さに見舞われることが多く、熱中症にも気をつけなくてはなりません。この暑さは、人だけではなく、カンキツ栽培にも影響が見られます。晴天は、おいしいカンキツを栽培するためには欠かせませんが、ミカンサビダニの多発や日焼け果の多発などの弊害もあります。今回は、日焼け果の対策について解説します。

1 発生実態

昨年は、梅雨明け以降、40日程

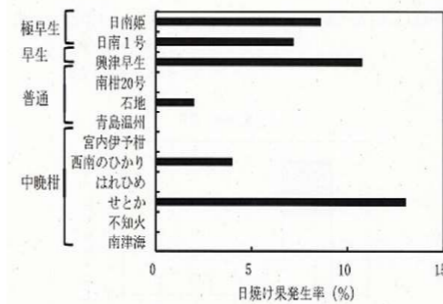


図1 カンキツの品種別日焼け果の発生 (2016年山口県かんきつ振興センター)



写真1 日焼け果(品種:せとか)

度、全く雨が降らず干ばつ気味であったことに加え、気温が高く、カンキツ類で日焼け果が多発しました。この日焼け果は、日射による高温障害とされ、夏の日射を受けたカンキツの果実表面温度は、外気温よりも約15℃高い45℃程度になるといわれています。果実表面温度が高くなり、水分補給が追いつかず乾燥により細胞が破壊されることで発生します(写真1)。発生時期は、8月下旬〜9月にかけて、ほとんどの品種で発生しますが、「せとか」や「早生系の温州みかん」で発生しやすく、品種により発生頻度が異なります(図1)。

2 発生条件

気象条件は、曇天が続き、急激に気温があがり、日差しがきつくなると発生しやすくなります。樹体条件では、着葉数が少ない樹は発生しやすく、葉が少なく根も少なく、吸水能力も弱い樹といえます。土壌条件では、過乾燥と過湿が繰り返されるような土壌で発生しやすくなります。

発生は、果実の着果位置が重要です。天成り果実や外周部の下垂しにくい常に日射を受ける位置にある果実は日焼け果が発生しやすくなります(図2)。また、上向き果実は、下垂する果実よりも水分を引っ張りやすく、果皮の成長が軟弱気味になることも原因と考えられています。

3 被害防止対策

対策は、8月中旬頃から行い、まず、発生しやすい天成りや樹冠外周部の、果梗枝の太い下垂しにくい果実を中心に摘果を行います。着果が少なく摘果できない場合は、外成り果実だけにサンテやネルネット(白色かピンク)の被覆(写真2)や果実の陽光面に紙製のクラフトテープ(ガムテープ)を貼り付けることで日焼けを軽減できます(布製は糊が付着するので使用しない)。また、干ばつ

4 おわりに

土づくりや施肥による健全な樹体づくりは、日焼け果等の果皮障害の軽減だけでなく品質向上や増収などにつながる長期的な総合対策になります。土づくりによる「根づくり」は、すぐに効果が現れませんが「継続は力なり」です。体力に見合った日ごころからの管理に努めてください。



写真2 日焼け帽子のピンクサンテ

傾向が続く場合は灌水を行います。冬季の堆肥や腐葉土などの施用による土づくりは、発根促進による樹勢維持と葉数を増加させることで日焼け果等の対策になります。日焼けを起こした果実は、軽微な被害でも、成熟後の果肉がスナガリ(水分欠乏)し、炭疽(たんそ)病の発生原因となるので、涼しくなる秋口に日焼け部の黄色が判別できる頃までに被害果実を摘果する。着色し始めると、ひどい日焼け果は判別できませんが軽いものはわからなくなるので注意してください。